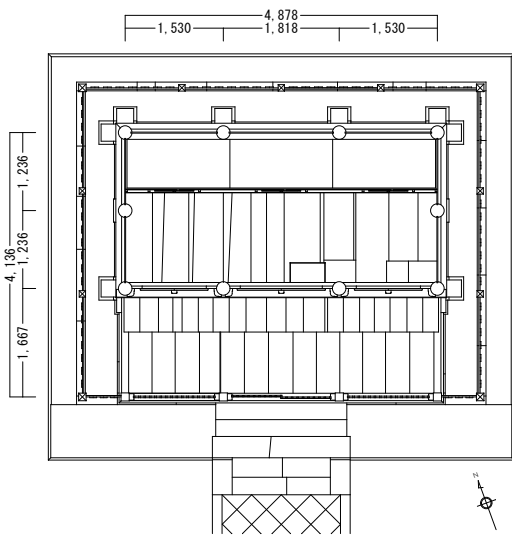


Iwashimizu-hachimangu shrine
いわしみずはちまングう
石清水八幡宮
せつしやとがのおしやほんでん
摂社狩尾社本殿

八幡市

桃山時代 慶長6年(1601)

事業期間：令和3年11月～令和6年10月（予定）



本殿 平面図

れることとなりました。

現在の社殿の多くは、寛永8年（1631）～11年（1634）にかけて徳川家光によって造替されたもので、このうち本社を構成する10棟が国宝に、摂社狩尾社本殿を含む8棟が重要文化財に指定されています。

摂社狩尾社本殿 重文

《修理中》

狩尾社は本社西方約1キロの飛地境内に鎮座する摂社で、祭神として大己貴尊・天照大神・天兒屋根命を祀っています。創建は詳らかでないものの、八幡神が男山へ勧請されたこと

に伴い、男山の地主神が場所を移して祀られることになったと伝えられています。

現在の本殿は、慶長6年（1601）にお亀の方（徳川家康の側室、尾張徳川家の始祖・徳川義直の母、石清水八幡宮の社務・田中家の親戚）が本願人となって建てられたもので、石清水八幡宮に現存する社殿としては最古のものになります。

社殿は三間社流造、檜皮葺の建物で、正面を切石積、側背面を野面石積とする基壇上に建てられています。底部には浜床を、身舎正面には棚を設け、庇柱の間には格子戸と竹の節欄間を建て込み、側背面には板玉垣を廻らしています。この要素は、身舎の正側面に縁と木階を設ける典型的な流造とは大きく異なっていて、あまり類をみない石清水八幡宮独自のものとなっています。外部は丹塗を基本とし、庇の頭貫・組物・墓股等を極彩色で装飾、内部は素木としています。

修理の内容

修理前は、基壇の石積みにも孕みや崩落が生じ、この影響で地盤面には不同



修理前 外観



修理前 棚・浜床廻り

沈下が、建物全体には著しい歪みが発生していました。また、屋根は随所で雨漏りを生じ、漆喰壁の一部は脱落、彩色や丹塗等については経年劣化による剥落が進行していました。

以上のような状況から、今回の修理では建物を解体するとともに、基壇の石積みまで解体した上で組み立て直すという根本的な修理を行っています。令和5年度は、木部を組み立て、檜皮葺の葺き直しを行います。

なお、解体中の調査からは、軸部の

大部分に建立時より古い部材が使われていて、室町時代に建築されたほぼ同じ規模・形式の前身建物の部材を用いて建て直されていることがわかりました。また、塗装については、現状の丹塗の下から古い彩色の痕跡が見つかり、身舎柱の頂部や軒桁・舟肘木等に牡丹唐草や波等が描かれていた時代があることが判明しました。屋根については、かつてはこけら葺や木賊葺という薄い木の板で葺いていた時期があることが分かっています。



調査図面（軒桁、下より痕跡図・白描図・白黒の復原図）



丹塗の下から見つかった波の絵の痕跡（庇桁）



小屋組の解体



石積みの積み直しの様子



取替材（木負）の加工の様子



軒桁・棟木の組立